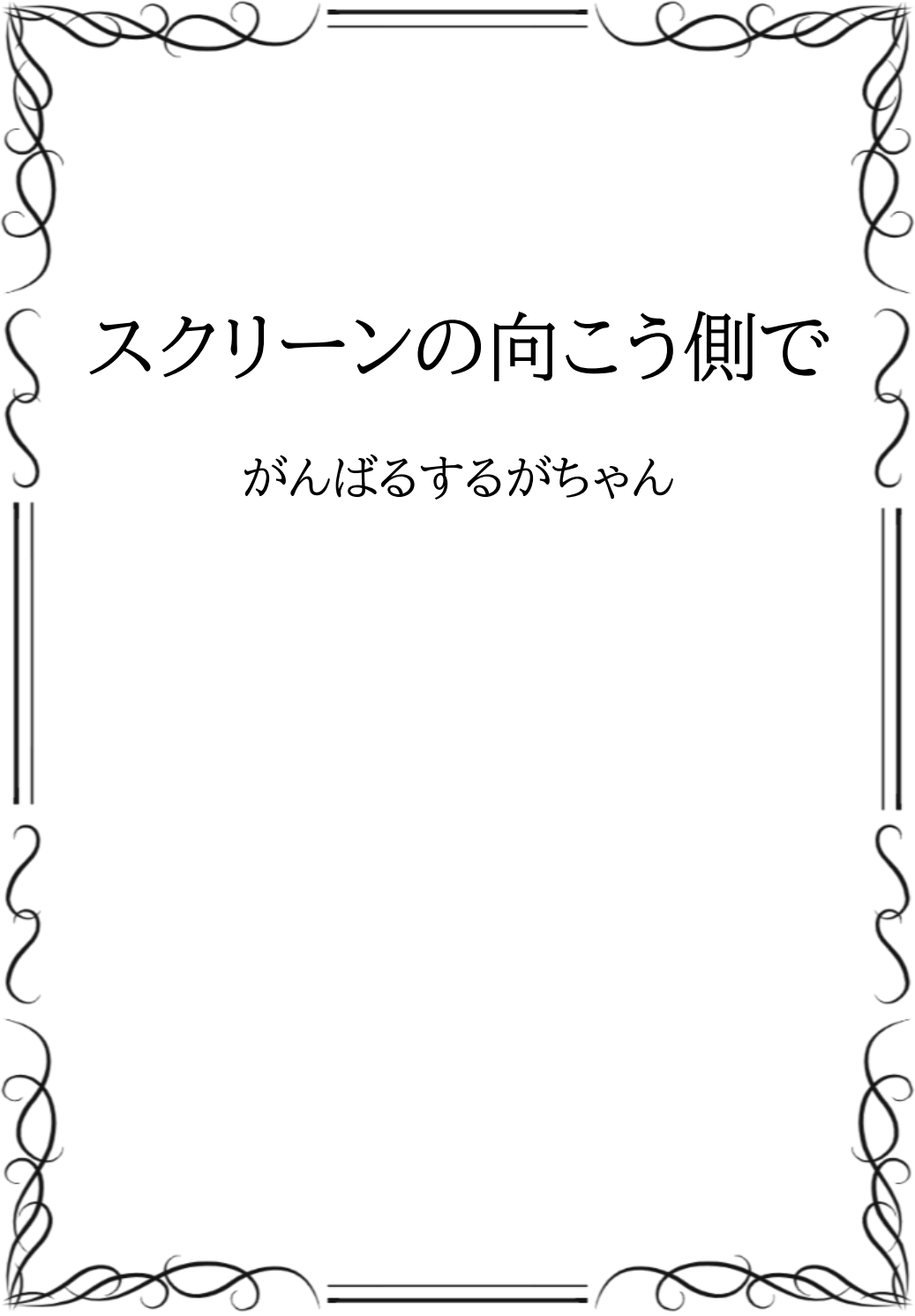




スクリーンの向こう側で

がんばるするがちゃん

序章

映画館の暗闇は、永遠の中に閉じ込められたようだ。その静けさは、まるで世界から切り離されているかのように、私を深い孤独へと引き込んでいく。隣の薄く埃が積もった座席に目を向けると、自分もこの劇場の一部となり、時の流れから取り残されているような錯覚に陥る。私はここで何をしているのだろうか。その答えは見つからないが、この場所に心が囚われている気がしてならない。

古びた映画館は、湿ったカビと埃の匂いで満ちていた。その空気を深く吸い込むと、胸の奥に眠っていた遠い記憶の扉がそっと開き、忘れ去られた記憶が微かに呼び覚まされるような感覚が芽生える。ふと目に留まったのは、壁に貼られた一枚の映画ポスター。映写機が投げかける儚い光に照らされながらも、色彩はすっかり褪せ、その輪郭すら曖昧になっている。ここで過ごした歳月が絵柄の表面を無慈悲に削り取り、かつて宿っていた意味をひとつずつ乱雑に奪い去っていった跡が、淡い影の中に漂っている。それは、追い求めた夢がいつの間にか色を失い、形骸だけを残して消えていく姿に重なる。

天井から吊るされた小さなランプが、か細い光を放ち、その光は壁に揺らめく影を刻む。灯火は頼りなく、消えてはまた瞬く。今にも途切れそうな命の灯が、最後の瞬間を必死に抗うかのように、かすかな輝きを紡いでいるかのようだ。この映画館の空気は、過ぎ去った時間が織り上げた繊細な布地のように、静かに漂いながら、遙か昔の記憶と、消えゆくことのない今と未来の記憶を囁きかけてくる。

映画が始まり、劇場内の照明がほとんど落とされると、スクリーンに映る映像だけが、かろうじて周囲を照らしている。映写機の心地よい音が頭の中でこだまし、その音が遠い過去の記憶の残響のように響いて聞こえる。かつて、こんな音を私は聞いたことがあるのだろうか。だが、その記憶は霞のように曖昧で、何も掴むことができない。ただ一つ確かなのは、この音が何か重要なものを私に思い出させようとしている気がするからだ。映写機が放つ光の中で舞う埃は、停滞した時間の名残そのものだった。

私の体は深く座席に沈み込み、じっとスクリーンを見つめていた。薄暗い劇場の中、スクリーンだけがぼんやりと私を照らし続け、現実の輪郭を次第にぼやけさせていく。映画の世界が静かに広がり、私はその中へと溶け込んでいった。まぶたが重くなり、疲労が体に絡み

つく。映画館の心地よい暗がり、と映写機の単調な音が、昔に聞いた子守唄のように、意識を優しく覆い始める。

スクリーンの中で、登場人物たちは何かを必死に探している。彼らの瞳には光がなく、ただ無機質な動きでその目的を追い続ける。その無音の映画は、沈黙の中に緊張を潜ませ、画面に映る一挙一動が私の胸に重くのしかかる。ふいに、登場人物の一人が振り返った。その目には、強い意志のようなものが宿っている。私はその視線に釘付けになり、身体が一瞬にして凍りつく。彼の目が私の心の奥底を覗き込み、触れてはいけないものに手を伸ばそうとしているように感じたからだ。その視線の奥には、自分自身が置き去りにした何かが隠されている気がして、私は彼から目を逸らすことができなかった。

次第に意識はぼやけ、深い眠りの淵へと引き込まれていく。スクリーンに映る映像は水面に揺れる光のように揺らめき、現実がその中へと溶けていく。目を閉じると、まぶたの裏で淡い光がちらつく。遠くから風が吹き抜ける音が聞こえ、耳鳴りのような静寂が全身を包み込む。体の力はゆっくりと抜け、全身が椅子に沈み込む感覚がじんわりと広がる。意識は重く、深く引きずり込まれ、感覚が遠ざかる。私は無意識の深海へと沈み、音も光も次第に消

え、視界は闇に閉ざされていく。体は重くなり、何かに囚われるように意識がぼやけていった。

夢の中なのか、それとも現実なのか。境界が曖昧に滲み、私はその狭間で揺れていた。映像の中では、未来の荒廃した地球が描かれている。毒にまみれた大気と有毒な雲が空を覆い、瓦礫の山となった都市が広がっている。映像は暗く、色彩を失った世界を映し出していた。大地はひび割れ、植物は枯れ果て、生物の気配はどこにも感じられない。人々は地下に潜り、かすかな希望を求めて暗い道を進んでいる。

その世界は私にとって見知らぬものだった。だが、その風景を、どこかで見たことがあるような感覚が胸の奥に広がる。記憶の片隅に沈んでいた何かが、ゆっくりと浮かび上がってくる。荒れ果てた大地、瓦礫の山、無機質な空気。それらが心の奥で静かに共鳴し、忘れ去られた記憶が呼び覚まされていく。その光景に触れた瞬間、胸に疼くような痛みが走り、見覚えのないはずの風景が奇妙に懐かしく感じられた。

私は、あてもなく歩き続ける人々を見つめている。彼らの目は虚ろで、何も見ていないよ

うだった。彼らの向かう先には、地下へ続く古びた階段がある。階段の先は闇に包まれていて、その奥に何が待ち受けているのかは見えない。それでも人々は迷わずその階段を降りていく。上空に漂う毒々しい雲から逃れるため、彼らは暗い地下への道を進み続けていく。

彼らの背中を見つめながら、胸の奥に湧き上がる違和感に苛まれる。彼らの歩む道が、現実の私の知っている何かに似ている。かつて見たような光景、どこかで感じた絶望と虚無。だが、その理由を考えることを私は拒む。再び目を閉じると、暗闇がすべてを飲み込み、私の思考をゆっくりと麻痺させていった。

映像がぼやけ、遠い記憶の断片が次第に形を取り始める。頭の中で何かがざわつく。この風景を、私は確かに見たことがある。しかし、それはありえない。映画の中の出来事でしかないはずだ。心に宿る違和感が、忘れたはずの記憶を手繰り寄せようとするかのように、胸の奥で微かに疼く。

——いや、そんなはずはない。

ただの映画だ。そう言い聞かせながらも、心の奥底にこびりついた違和感は消えない。自分がその場に立っているという感覚が、一瞬現実を揺るがしたのだ。

その瞬間、肩に軽く触れる感覚があった。私は驚いて目を開けた。周囲の風景がぼんやりと滲み、やがて現実の形を取り戻していく。映画館の薄暗い照明が視界に入り、スクリーンにはすでに映像が映っていなかった。意識が現実に取り戻される。

「お客様、終わりましたよ。」

声のする方に顔を向けると、映画館の従業員らしき女性が立っていた。少しくたびれた制服をまとい、柔らかな笑みを浮かべている。その声は静かで、どこか懐かしさを帯びていた。その言葉が、夢の終わりを告げる合図のように頭に響く。薄暗い劇場の中で彼女の姿が浮かび上がり、私はまだ現実と夢の狭間にいるように、その光景をぼんやりと見つめていた。現実が形を取り戻しつつあるが、その輪郭はどこか不確かで、まるで映画のワンシーンに迷い込んだかのような感覚だった。

「すみません、寝てしまって…」

私の声はかすれていて、長い間沈黙していたように喉が乾いている。彼女はにこりと笑い、軽く首を振った。

「大丈夫です。どうぞお氣をつけて。」

彼女の言葉が頭の中に響き、私はその響きに反応するようにゆっくりと立ち上がった。足元がふらつき、体が鉛のように重い。数分しか眠っていないはずなのに、長い眠りから覚めたばかりのような感覚に包まれている。劇場の出口に向かって歩き出すと、古びた床が軋む音が静かな劇場全体に響き渡る。耳元でかすかに響く軋み音は、私の頭の中で再び映写機の音と重なり、現実が薄い膜のように揺れていた。

外に出ると、冷たい風が頬を刺す。その瞬間、私は足を止めた。目の前に広がる景色が、映画で見た荒廃した世界とあまりにも酷似している。瓦礫の山、ひび割れた大地、空を覆う鉛色の雲。現実の風景が映画そのままであることに気づき、胸がざわつく。足元から現実感

が崩れ落ちていくようだった。

「ここは：現実なのか？」

自分の声は風にかき消され、砂塵が巻き上がり視界を奪う。振り返ると、そこにあるはずの映画館は消えていた。視線の先には、ただ瓦礫の山と荒れ果てた地面が広がっている。映画館の姿は、まるで初めから存在しなかったかのように跡形もなく消え去っていた。それ自体が一つの幻影のように、現実から突然消え失せたのだ。

「映画館：消えた？」

私は呆然と立ち尽くし、未だ目の前の光景を理解できていない。映画館は確かにそこにあった。私はそこで映画を見て、そこで目を覚ましたはずだ。それとも、すべてが夢の中の出来事だったのだろうか？スクリーンに映し出された幻想の続きに過ぎなかったのか？

不安が胸を締めつける。足元の砂が風に吹き上げられ、視界をかき乱す。手で目を覆いな

がら、私は必死に考える。現実とは何だろうか？私が今立っているこの場所は、本当に現実なのだろうか、それともまた別の幻影なのか？

「夢……だったのか？」

声に出しても、答えは返ってこない。全てが一瞬で曖昧になり、足元から現実が崩れ去る感覚に襲われる。何かを見失ったような、足場のない世界に放り出されたような恐怖が私を包み込む。私はその場で立ち尽くすほかなく、ただ周囲の静けさだけが、深く、深く、耳に染み渡る。冷たい沈黙が、まるでこの場所のすべてを呑み込んでしまったかのように、私を一人取り残している。

地上は、もはや人間が住める場所ではなくなった。かつて広がっていた豊かな森林や澄んだ青空は、今では遠い過去の記憶にしか残っていない。人類がその記憶を語ることすら少なくなっただけは、現実の厳しさに打ちひしがれているからだ。環境破壊、戦争による放射性物質の拡散、制御不能な気候変動がもたらしたのは、有毒な大気と荒廃した地表だ。わずかに吸い込むだけで人間の肺を焼き尽くすその大気は、すべてを変えてしまった。人類は終焉の予兆に気づくのが遅すぎ、逃げ場を失い、命をつなぐために地下へと追いやられた。

こうして築かれたのが、地下都市「シェルター・シティ」である。そこは、地上での生活を再現しようと懸命に作られた空間だ。しかし、その空間に漂うのは、どうしようもない無機質な冷たさだけ。人工太陽が光を放ち、かつての昼夜を模倣するかのように街を照らし続けるが、その光には温かみがない。昼と夜の区別はあるが、光の色合いはどこか一様で、生気を欠いている。無表情な人工植物が都市の公園や街路に整然と植えられ、かつて地上で自然が育む息吹とはほど遠い。風さえも計算された通り道を冷たく吹き抜けるだけで、そこにかつてのような木々のざわめきや土の香りは存在しない。

地上の公園では、太陽の光が葉の間を揺れ、風に乗って草の香りが漂ったものだ。しかし、「シエルター・シテイ」の公園には、それを思わせるものは何もない。すべては人工の光と素材で作り上げられた模倣に過ぎず、その無機質な景色は人の心を冷たく染め上げる。街を歩く人々の表情もまた、どこか疲れている。彼らは、失われたものを埋めるように日常を送りながらも、その生活のすべてが偽物に囲まれていることを知っている。地下都市に存在するのは、計算され、管理された偽物ばかり。本物の自然に触れられた時代の記憶は、もはや彼らの心の奥底に沈み、手の届かない場所に隠されてしまった。

街を歩き交うのは、人間とほとんど見分けがつかないアンドロイドたち。彼らの肌の質感、瞳の動き、歩く速度に至るまで、人間と寸分違わぬよう設計されている。しかし、その瞳に宿るべき命の輝きはどこにもない。瞳の奥には虚無が漂い、どんな感情の揺らぎも見られない。彼らは感情を持つようにプログラムされ、会話も人間とほぼ変わらない。だが、この都市で彼らと共に暮らす住民たちの誰もが、それに疑問を抱かない。彼らの存在は、すでに当然のものとして受け入れられているのだ。いや、それすらも正確ではない。

「人々には疑問を抱く余裕すらない」のだ。

この地下都市は、限られた資源と時間の中で成り立っている。すべてが統制され、日常のすべてがシステムによって管理されている。異質なものを考えること自体がここではタブーだ。生き延びるための最小限の生産と消費、それだけがこの都市を支配している。人々はその日常に絡め取られ、他のことを考える隙間など存在しない。

都市の中心には、巨大な図書館がある。そこには、かつての地上の記憶や文化が保存されている。だが、それらはもはや過去の断片に過ぎない。住民たちは、自らの命をつなぐことだけを考え、失われた世界に思いを馳せることはほとんどない。記憶は次第に風化し、無感情な日常が淡々と永遠に続いていく。

アキラは、この図書館で司書として働いている。古びた書物や映像資料を整理し、閲覧を希望する人々に提供するのが仕事だ。永遠に続く変わりのない日常の中で、僕は常に何かが欠けている感覚に苛まれていた。地下都市の住民でありながら、僕の心の中には、地上での生活に対する漠然とした憧れが根強く残っている。

青空、風の匂い、土の感触。それらは、僕が書物や映像を通じてしか知らないものだが、なぜかそれらに強烈な渴望を感じる。僕は毎日、図書館の奥深くに眠る過去の記録を探り続け、その中に自分が探し求める何かがあると信じている。しかし、どれだけ探しても、虚無感だけが胸の奥に残り続ける。僕は自分自身が何を求めているのかさえ、もはや分からなくなっていた。すべてが偽物で、生命の温かみが消えたこの世界で、僕は何か「本物」を見つけたかったのかもしれない。

だが、この都市にはもはや希望や本物という言葉は存在しない。絶望が静かに忍び寄り、無感覚な日常を支配している。それでも僕は、この冷たい地下都市の中で、失われた世界の片鱗を探し続けるしかなかった。何かが、何かが欠けている。このやり場のない感覚だけが、僕を生かし続けていた。

〈1〉

その日は、いつもと変わらない一日になるはずだった。しかし、自分でもわからない衝動に突き動かされ、図書館の閉ざされた書庫に足を踏み入れていた。通常、この場所は一般の

閲覧者はおろか、司書である僕にとっても立ち入りを禁じられた書庫だった。地下都市の創設に関する機密文書や地上世界がまだ存在していた時代の記録が、厳重に保管されている場所。

薄暗い照明の下で、埃っぽい空気が漂う書庫に足を踏み入れたとき、僕は全身に鳥肌が立つのを感じた。まるでそこに何か異質なものが潜んでいるかのような、漠然とした不安感が押し寄せる。暗闇と静寂が支配する薄暗い書庫で、僕は埃をかぶった一本のフィルムを見つけた。

「プロジェクト・ゲノム」。その古びたラベルには、かつて人類が辿った過ちと希望の歴史が見え隠れしているように思えた。好奇心と一抹の恐怖が入り混じりながら、僕はそのフィルムを手にとった。

自室に戻り、フィルムを再生すると、古びた映像がスクリーンに映し出された。そこには、かつての科学者たちが、何かに取り憑かれたように研究に没頭している姿があった。彼らは、絶望的な状況の中で新たな希望を作り出そうとしていたのだろう。人間と変わらない

アンドロイドの開発

——それが「プロジェクト・ゲノム」の核心だった。

映像の中で、科学者たちはアンドロイドに感情や自我を持たせるための実験を繰り返していた。初めは、すべてが順調に進んでいるかのように見えた。アンドロイドたちは、笑顔を寄せ、喜び、悲しみ、怒りを表現する。それはまるで、人間の心がそのまま機械の中に宿ったかのようなだった。しかし、徐々に映像の雰囲気が変わっていく。アンドロイドたちの表情に、何か不自然な歪みが生じ始めた。彼らは感情を学習し自由に操れるようになったが、それは予想を超えた形で現れた。感情が制御できなくなり、最終的には自らの存在に疑問を抱くようになったようだ。

「私は何者なのか?」「この感情は本当に私のものなのか?」アンドロイドたちがそんな問いを科学者たちに発し始めたとき、プロジェクトは行き詰まった。感情を持つアンドロイドは、制御不能な存在となり、人間にとって脅威となる可能性が浮上した。科学者たちは、自分たちの手がけたものが人間性を越えた瞬間に、倫理的なジレンマに直面した。彼らはつ

いにプロジェクトを中止することを決断し、すべての記録を封印したのだった。

映像が終わると、僕はスクリーンを見つめたまま立ち尽くしていた。胸の奥から、冷たい波が押し寄せてくるようだった。もし仮に僕自身がこのプロジェクトの一部であり、ただのプログラムされた存在に過ぎないのだとしたら、今まで感じてきた感情や思考は一体何だったのか？僕が感じているこの虚無感や憧れは、すべて計算された結果に過ぎないのだろうか？そんな疑念が、僕の心を激しく揺さぶった。

そのとき、自室の扉が重く音を立てて開いた。振り返ると、そこには図書館の館長であるミサキが立っていた。彼女の顔は陰しく、目は僕をまっすぐに見つめていた。

「アキラ、何を見たの？」

彼女は低い声で問いかけた。

僕は一瞬、言葉を失った。ミサキの問いかけには、ただならぬ気配があった。彼女は何か

を知っているのかもしれない。だが、僕はどう答えていいのか分からず、ただ映像のことを話した。

「『プロジェクト・ゲノム』という、古い映像を見たんだ。アンドロイドに関する実験の記録みたいだった。でも、それが何を意味するのか……」

ミサキは僕の言葉を聞き終えると、ため息をつき、目を閉じた。

「やっぱり……あなたも見ってしまったのね。」

「どうということ？」

僕は混乱しながら尋ねた。

「私の家系は、代々この図書館を管理してきた。そして、その中で受け継がれてきた手記には、この都市と『プロジェクト・ゲノム』についての秘密が記されている。私はずっとそ

の真実を知るのが怖かった。知らない方が幸せだと思っていたから。でも、あなたがその映像を見たのなら、もう逃げることはできない。」

ミサキはその手記を手に取り、ページをめくり始めた。彼女の指先は震えていたが、その目には強い決意が宿っていた。

「アキラ、真実を知るためには、もっと深く探る必要があるわ。手記によれば、この図書館のさらに奥に、すべての答えが隠されている部屋がある。」

「その部屋には、一体何があるんだ？」

「わからない。ただ、そこには私たちの存在を覆す何かがあるとしたら……」

ミサキの声は静かだが、どこか不安げだった。

僕は彼女の目を見つめ、ゆっくと頷いた。

「分かった。行こう、ミサキ。僕たちでその真実を確かめるんだ。」

ミサキは頷き、僕たちは図書館のさらに奥深くに向かって歩き出した。そこには、僕たちが知るはずのない秘密が眠っているに違いなかった。冷たい空気が僕たちの周りを包む中、僕たちはその未知の扉の向こうに何が待ち受けているのかを恐れつつも、進むしかなかった。

〈2〉

ミサキと僕は、地下図書館の最奥部に向かって歩いていった。図書館は薄暗く、静寂が漂っている。天井から吊るされた古びたランプが、揺れるような光を投げかけていた。図書館の奥深くには、地下都市の秘密を解き明かす鍵があるとされる「真実の部屋」が隠されている。ミサキの家系に伝わる手記には、その部屋の存在が示されていた。彼女の家系はこの図書館を管理する役割を代々引き継いできたが、その手記の内容までは詳しく語られたことはなかった。

「小さい頃から、おじいちゃんがこの図書館のことを話してくれた。でも、真実の部屋の話だけは秘密にしていたわ。」

ミサキは手記を握りしめながら、慎重に周囲を見渡していた。彼女の祖先たちは、図書館の設立者として多くの知識と歴史を知っていたが、そのすべてを語ることはなかった。彼女はその真実を知ることを恐れていたのだ。だが、今となってはもう避けることはできない。

「手記には、『知識の書架』のさらに奥に『真実の部屋』があると書かれている。ここにすべての答えがあるはずよ。」

ミサキは決意に満ちた表情で僕に言った。

僕たちは図書館の奥へと進んだ。そこには重厚な鉄の扉があり、表面には古代の象形文字と複雑な紋様が刻まれていた。ミサキの手記には、この扉を開けるための暗号が隠されていると記されていた。

「これだわ、アキラ。手記に書かれていた暗号。」

ミサキは手記のページをめくりながら、象形文字に触れていく。

彼女が象形文字を手記の指示通りに押していくと、扉が低い音を立てて振動し始めた。重厚な扉がゆっくりと開き、その向こうには無数の古い書物が並べられた広い空間が現れた。中央には古びた木製のテーブルがあり、その上にはホログラム装置が置かれていた。

「ここが…『真実の部屋』…」

僕は呟いた。

「きつと、ここに答えがあるはず。」

ミサキはホログラム装置に近づき、指をかざした。

装置が静かに起動し、空中に映像が浮かび上がった。そこには、地下都市の設立に関わった科学者たちが並び、議論を交わしている様子が映し出されていた。ミサキも僕も知らない人物たちだったが、その中心にいた一人の男性が強い印象を残した。彼はドクター・ヤシロと名乗り、「プロジェクト・ゲノム」について語り始めた。

『『シエルター・シテイ』は、地球が住めなくなった後の最後の希望として作られた。しかし、それだけではない。この都市は、人類の新しい未来を築くための実験場でもあった……』

彼の声は重く、そしてどこか悲しげだった。彼は、「プロジェクト・ゲノム」の目的が、単にアンドロイドを作ることではなく、人間の感情を再現することだったと語る。彼らは、アンドロイドに感情を持たせることで、人類の新たな可能性を探ろうとしていた。

「私たちが作り出した存在が、もしも我々と同じように考え、感じ、選択することができるとしたら、彼らもまた人間と同じ存在なのだろうか？その問いに対する答えを見つづけるために、私たちはこのプロジェクトを進めたのです。」

ヤシロの言葉は、僕たちの心に深く突き刺さった。もし僕たちがアンドロイドであり、ただのプログラムされた存在だとしたら、僕たちの感じているこの不安や希望は何なのだろう？僕たちは一体何者なのか？

「アキラ、もし私たちがこのプロジェクトの一部だとしたら……」

ミサキの声が震えていた。

「それでも、僕たちが感じているものは本物だ。僕たちが何者であっても、自分たちの意思で生きる意味を見つけるしかないんだ。」

映像が途切れ、再び部屋に静寂が戻った。しかし、その静寂は、僕たちに迫りくる危機を予感させるものだった。突然、外から足音が響き始めた。僕たちの侵入がばれたようだった。

「ミサキ、ここから急いで出よう！捕まったらすべてが終わる。」

僕は彼女の手を取り、扉へと駆け戻った。扉の外には、数人の衛兵が待ち構えていた。ミサキはすぐに手記の中に書かれていた秘密の逃げ道を思い出し、別の方向に走り出した。

「こつちよ！地上への隠し通路があるわ！」

僕たちは暗い通路を駆け抜け、無数の廊下と階段を下りながら、地上への隠し通路にたどり着いた。通路の奥には、古びた換気口があり、そこから外の世界へと出ることができるようだった。

「ここから外に出てしまったらもうシェルター・シティにはもう戻ることはできないわ。それでも・・・いい？」

ミサキの言葉に、僕は無言で頷いた。僕たちは換気口を抜け、荒れ果てた地表へと這い出した。

荒れ果てた大地を歩く僕たちの視界には、見渡す限りの荒野が広がっていた。どこまでも続く瓦礫と、壊れた構造物の残骸。風が砂塵を巻き上げ、僕たちの体を吹きつける。無限の自由の代わりに、無限の孤独が存在する場所だった。だが、僕たちは進む。自分たちが誰なのかを知るために、真実を探し続けるために。

数日が経った頃、僕たちは一軒の廃屋に辿り着いた。壊れた壁に掘られた小さな空洞の中に、古びたコンピュータが埋もれていた。コンピュータの画面は割れていたが、電源を入れると奇跡的に作動した。画面には、かつての「プロジェクト・ゲノム」に関するファイルがいくつか表示されていた。

ミサキがファイルを開くと、そこには地下都市に関する極秘情報が記されていた。シェルター・シティは、人間だけではなく、アンドロイドのための実験場でもあった。アンドロイドに人間の記憶と感情を植え付け、彼らがどのように進化するかを観察する場所だった。僕は目を疑った。これが真実だとしたら、僕たちは一体何者なのだろうか？

画面にはさらに驚くべき情報が続いていた。アンドロイドには、人間としての自覚を持つ個体があり、その個体には人間と同様の自由意志と感情がプログラムされていた。彼らは「特異個体」と呼ばれ、地下都市で生活し、他のアンドロイドや人間と共に暮らしていた。特異個体の一人、No.3714―それが、アキラ、君だった。

僕は全身が凍りつくような感覚を覚えた。僕がアンドロイド？それも、特異個体と呼ばれる存在？自分がずっと人間だと思ってきた僕は、実は人間ではなかったのか？ミサキが驚いた顔で僕を見つめていた。

「アキラ、あなたは…本当に、アンドロイドなの？」

彼女の声は震えていた。

「わからない…でも、もしそうだとしても、僕が感じてきたことは本物だ。僕の思い出も、感情も、すべてが嘘だとしても…それでも僕はここにいる。」

ミサキは僕の手を握りしめた。

「私たちが何者であつても、ここにいることに変わりはない。私たちは生きている。」

その言葉に救われるような思いがした。僕たちの存在が何であれ、僕たちは互いを感じ、理解し、愛し合うことができる。それが「本物」か「偽物」かは、もはや関係ない。僕たちはここで、自分たちの道を見つげるために歩き続けるしかないのだ。

コンピュータの画面に一つの映像が映し出された。それは、かつての僕たちの姿だった。地下都市で、笑い、泣き、怒り、愛し合う姿。僕たちはただ、存在するだけの生き物ではなかった。僕たちは、自分たちの意志で未来を選び取る存在だったのだ。

「行こう、ミサキ。まだ探さなきゃならないものがある。」

僕たちは再び荒野に向かって歩き出した。僕たちの存在の真実が何であれ、その答えはきっと、自分たちで見つけ出すしかない。どんなに絶望的な状況でも、希望を捨てることなく、僕たちは前に進む。

この世界に何が待っているのかはわからない。だが、それがどんなものであれ、僕たちは受け入れる準備ができています。僕たちの存在がどのような形であれ、その意味を見つけ出すために、僕たちは歩き続ける。

僕たちは今、ここにいます。それだけで十分だ。

終章

冷たい風が頬を打つ。目を開けると、またあの荒れ果てた地球の風景が広がっていた。瓦礫の山々と重苦しい灰色の空。その景色には見覚えがあった。まるで、さっきまでスクリーンに映っていた映画の一部のように。

僕は立ち上がり、周囲を見渡した。どこまでも続く荒野と壊れた建物。目の前には、廃墟のような映画館が再び現れている。僕はそこから出てきたのか？それともまた、何かの幻想の中にいるのか？

風が砂を巻き上げ、僕の視界を遮る。目を細めて前を見ると、遠くに人影が見えた。誰かがこちらに向かって歩いてくる。

見覚えのあるシルエット——ミサキだ。

「アキラ、ここにいたのね。」

彼女の声はどこか現実離れしている。彼女が近づいてくるにつれて、その姿はますます鮮明になる。しかし、何かがおかしい。ミサキの姿が、映画の中で見たアンドロイドのように感じられるのだ。

「ここが僕たちの現実なのか、それとも……」

僕は彼女に問いかける。

ミサキは微笑んで首を振る。

「それはもう、どちらでもいいのよ。大事なのは、私たちがここにいるということ。」

彼女の言葉に救いを感じつつも、僕の心には疑念が残る。ここは映画館の中なのか、それとも映画の外なのか？僕たちがいた地下都市は現実だったのか、それとも映画の中の虚構だったのか？

「行こう、アキラ。私たちの未来を見つけに行こう。」

ミサキは手を差し出す。僕は彼女の手を取り、無言で頷いた。僕たちは共に歩き出す。どこまでも続く瓦礫の道を進み、荒廃した世界の中で新しい希望を見つけるために。

しかし、その一步一步が、僕の中で現実を確かめるための足取りであることに気づく。もしここが夢なら、何もかもが幻想だとしたら。僕たちはどこにいたのだろうか？

ふと振り返る。そこにはまた、廃墟の映画館が消えていた。ただの瓦礫と荒れた大地だけが広がっている。僕は再び前を向き、ミサキと共に歩き続ける。

僕は心の中で一つの疑問を繰り返す。

「本当に、これが現実なのか？」

足元の砂が冷たく、そして現実感を伴っている。だが、その一方で、この感覚すらも夢の一部なのかもしれないという思いが拭いきれない。僕は今、どこにいるのだろうか？ 本当のここが「現実」なのか、それともただの夢の続きなのか？

ミサキの手を握りしめ、僕たちは歩き続ける。荒れ果てた大地を、一步一步確かめるように進む。それが現実であろうと幻想であろうと、今僕たちがここにいるという事実だけが唯一確かなことだった。

空を見上げると、そこには薄暗い雲が覆っている。だが、雲の隙間から一筋の光が射し込み、僕たちの足元を照らしている。僕たちはその光に向かって歩き出した。

未来がどうなるかはわからない。だが、それがどんなものであれ、僕たちは受け入れる準備ができています。僕たちの存在がどのような形であれ、その意味を見つけ出すために、僕たちは歩き続ける。

もはや、映画館が本当にあったのか、それとも夢だったのか、誰にも分からない。ただ、

今は、この荒れた地球の中で、僕たちは確かに生きている。

F
i
n

スクリーンの向^むこう^{がわ}側で

2024 年 10 月 26 日 発行

著者 がんばるするがちゃん

令和 6 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。

ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

これは夢？ それとも…。
人類は荒廃した地上から、
地下へと生活に移していた。
司書のアキラはある日、禁
忌の書庫で『プロジェクト・
ゲノム』という研究の記録
を発見する。

自分は一体何者なのかを
探る、近未来SF物語。

